

スーパー読者の  
経営力が選ぶ

# あの商品この技術 11

西村誠治氏は、自身の経営を農村地域が新しい時代を迎えるまでの「ブレイキ役」と位置付ける。闇雲に規模拡大を目指さない「一人でもできる農業」だ。だからこそ、西村氏が使う最小限の機械には、最大の利益を上げる工夫が随所に施されている。

西村誠治氏は「一人でもできる農業」にこだわる。それはつまり「最小の機械で作業できる最大の面積を見極める」ということだ。

諫早湾干拓地の農地化事業にオペレータとして加わり、ヘリ防除・大豆転作コントラクターの農事組合法人の代表も務める西村氏は、現時点でそれを「15ha程度」とする。それ以上であれば機械を増やさざるをえず、償却費が利益を圧迫する。

西村氏は「規模拡大に自信も実力もある」と話す。なぜ「一人でできる農業」にこだわるのか。

「数名で50ha、100haの規模を経営する人はいる。しかし管理できるのは、その面積のなかだけで、周辺の河川や道路、畦畔まで手がおよばないことが多い。才覚ある人が経営を拡大することは自然の流れだとしても、地域を無視した自己中心的な経営は、環境保全という観点で見ても、農業の未来にとって望ましいとは思えない」

つまり西村氏は、自身の経営をブレイキ役にするので、集落の急激



長崎県諫早市

## 西村誠治氏

【経営データ】

- 年間売上：1000万円
- 経営面積：小麦15ha、コメ4ha（借地を除く自作地での裏作）
- 労働構成：本人、妻の2名
- 出荷先：小麦、コメともに地元JAへ全量出荷

※■の数字は資料請求番号です。

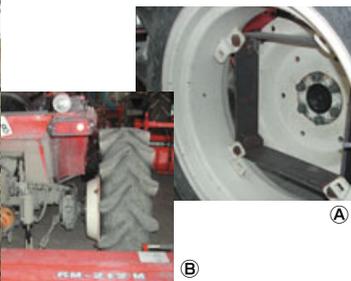


①ロータリカルチ（松山株「RM-212M」）西村氏の麦作の畝幅は130cm。カルチで土寄せする際、トラクタが通常の車幅では畝の肩を踏みつけてしまう。そのため、写真②③にあるようにトラクタのリアアックスルを40cmほど延長した。注目は、車軸を伸ばすのではなく、ホイールとディスクの間にマス状の鉄板を挟んでいること。そして、ディスクを反対に取り付け長さを稼いでいること。これなら「最低限の手間で改造できる。発想の転換」と西村氏。実際に畝をまたいで作業している様子は写真④。麦作は、除草や分けつ



西村氏の麦作は、一畝8条の密条薄播き。畝間が心で150cm、作業道を20cmとなっている。

トラクタ（ヤンマー農機株「FX24D」）西村氏はトラクタの購入に際し、そのシリーズの最小馬力を選ぶ。理由は「同じシリーズには同一エンジンを使っているケースがほとんどで、ストロークやボアの変更やセッティングで回転数を上げ、馬力を稼いでおり」高馬力のものほどエンジンへの負荷が大きいため。最小馬力である方が寿命も長く「使っているうちに各部位が摩耗し、力が上がる」とことさえあるという。西村氏が所有しているもう一台、ヤンマ一の「AF28J」も同様の理由で選んだ。





自作boomスプレーヤ

西村氏がコンバインの走行部を利用して作ったboomスプレーヤ。西村氏が使用しているのは、近隣農家に請われ過去20台作ったうちの初号機。boomには建築資材の鉄パイプを使い、ノズルやホースはホームセンターで購入。写真右下にあるように、走行する畝と両脇の3畝に液剤を同時散布できる。西村氏の圃場は、1往復(6畝)で20a。反当100ℓ散布するため、往復で200ℓ必要だが、ポンプへの吸い込みの効率を考慮し、300ℓタンクを積んでいる。散布時は、同機を畝に乗せ作業するが、分けつを促す麦踏みにもなるため好都合。水和剤には、写真右の「ハーモニー」を使う。1箱7万円かかるが除草効果はてきめんとのこと。希釈倍率は1袋(10g)で100ℓ。



除草剤  
(デュボン(株)「ハーモニー75DF水和剤」)



自作施肥・播種機  
(サン機工(株)「さばけるスーパーS1000」)

ロータリの後部に連結し、耕うんから施肥・播種まで一工程で作業できる、麦用密条薄播き播種機。西村氏は、5連、10条播きの同機を自身の圃場に合わせ、4連8条で使用。8条播きの「S-800」ではなく同機を使うのは、施肥・播種ロールを回転させる駆動輪が両サイドに2つ、畝をまたぐ形であるため。「S-800」だと中央にある駆動輪が刈り株などに引っかかり、ロールの回転が止まるなどのトラブルが起こりえるからだ。



振動サブソイラ  
(松山(株)「S27B」)

西村氏の圃場は粘土質。排水性促進のため、既設の暗渠管に直行する形で150cm間隔で同機を走らせる。硬盤に亀裂を入れ、簡易暗渠とするためだ。振動式で、けん引抵抗が小さいため西村氏の所有する30馬力以下のトラクタで作業可能。30cmよりやや浅い位置にある硬盤に弾丸部が当たるよう、深さを設定している。



自作麦踏みローラ

6馬力のティラーに装着し、写真右のように乗用型にして畝の上を走行する自作品。鉄製のローラだと農道の移動中、振動や騒音が大きいため、タイヤに代えた。後輪は6輪で、ティラーの車軸を延長して取り付け前輪は4輪。前輪を4輪にしたのは、接地圧を考慮してのこと。乗用型にしたため作業は「格段に楽になった」と西村氏は話す。



自作輸送用コンテナ  
トラックに乗せ、圃場から乾燥機まで麦やコメを運ぶコンテナ。乾燥機の張込み口には、らせん排出コンベアで送り出す。収容量は約1t、25a分の収穫物を積める。自作で一番困難だったのは、内部の傾斜。収穫時は麦やコメの水分が多く「容量との兼ね合いで流れを良くするため、どこまで傾斜をつけるか頭を悩ませた」と西村氏。



Ⓐ



Ⓑ



Ⓒ



自脱型コンバイン  
(ヤンマー農機(株)「CA355」)

4条刈り。西村氏は機械の使用年数を1年でも増やせば、分散される償却費が「利益」に転じるとの考えから、機械のメンテナンスには細心の注意を払う。写真Ⓐは、脱穀の心臓部こぎ胴。サビ止めに市販のカラーズプレーを吹き付けている。こぎ歯の摩耗は特に激しく、同処理は、摩耗対策にもなっている。同様に、金属部がむき出しの部位には新品のうちに塗料を塗る。写真Ⓑは、脱穀各部を駆動させるベルト。亀裂が入っていることがわかる。この状態でも1シーズンは使えるため、ベルトを取り寄せてもすぐには交換しない。収穫作業中でも、すぐに交換できるようにストックは写真Ⓒのようにミラーにかけておくが、熟練の整備技術があればこそこの発想だ。



自作コンバイン輸送車  
2tトラックの前輪車軸を利用した自作。トラクタでけん引し、コンバインを収穫する圃場まで輸送する。トラックの車軸を使ったのは、車軸の地上高が低いいため。荷台を低くすれば当然コンバインを乗せやすく、安定性や安全性につながる。車軸部がシーソーになっており、コンバインが乗り、重心が前にかかると水平になる。走行時はピンで荷台を固定する。

な変化を抑制しようとしているのだ。それは、特定の経営者が後継に水を開けることで生じる、地域の人間関係の軋轢を懸念してのことでもある。

西村氏が組織するヘリ防除と大豆転作コントラクターの農事組合法人も、営利目的というよりは、高齢の生産者や兼業農家の作業を助けるために結成された。いずれ農家が淘汰され、緩やかに集落が変わるまで、地域を守る「人手」をできるだけ確保しようというのが西村氏の考えであり、これが「一人でできる農業」にこだわる理由なのだ。

こうした経営観を持つ、西村氏の機械選びや改良、メンテナンスは、効率的な機械作業を考える上で注目する点が多い。

エンジン構造から寿命が長いであろうトラクタを選び、最小の馬力で最大の効果を上げられる作業機を組合せる。また、自分で作れるものは自作し、消耗品を最低限に抑える。

干拓地事業のオペレーターとして、700ha近い土地で100馬力トラクタを操作し、大型作業機を自在に操る西村氏は、自身の経営とのギャップをどう感じているのか。

「大規模経営への誘惑が頭をよぎることがあるが、その夢は次の世代に譲る。私は集落を守る経営をしたい」と西村氏は話す。(野村大樹)